

## ポットカーネーション サンフロールシリーズ

(*Dianthus caryophyllus*)

### サンフロールシリーズ

一般的なポットカーネーションやスプレータイプ同様ダイアンサス種の *Caryophyllaceae* に属し、極普通の栽培環境下ではポットで十分な矮性の特性を示します。従って、通常栽培ではわい化剤の使用は必要ありません。ただし実際の栽培ではよりコンパクトさを求めてわい化剤を使用することもあります。また、 $-5^{\circ}\text{C}$  から  $-10^{\circ}\text{C}$  まで耐えられるため、生産者と消費者での広い範囲での使用形態を可能にします。

### オデッサ ガーデンタイプ

このタイプはサンフロールシリーズに比べて、生育はより旺盛で草丈も高く生長し、初春から晩秋にかけて開花するため特に屋外でのパフォーマンスに優れております。

### ポットサイズ

9cm~17cmの間をお勧めします。株の直径が9cmから11cmを目指す場合は1回ピンチ、株の直径が11cm以上を目指す場合は2回ピンチを推奨します。

※上記のピンチによる株張りは、生育環境や使用するポットサイズにより異なります。

※オデッサタイプは通常12cmポットの生産に向いております。

※第1回目のピンチはその後の分枝を良くするために、最初の蕾が出たタイミングで行ってください。植え付けから約4-6週目が目安ですが、栽培環境によって異なるためご注意ください。

### 培養土

生産に使用する培土で気をつけることは、気層と個層の割合です。保水性と排水性を兼ね備えた目の粗い培土が品質向上には不可欠です。PH 5.5~6.5に調整し、基肥料として緩効性肥料を施用することをお勧めします。

### 追肥

必要に応じてマグネシウムを含んだ15-3-15-5のような割合の水溶性肥料の追肥を行ってください。定植後、初めての施肥は石灰窒素と10-52-10を使用することにより初期の生育が促進されます。定期的に培地のECチェックを行うことをお勧めいたします。培地のECは2.5以下に保つようにしてください。

### 灌水

灌水はなるべく午前中にするようにし、午後は培地が乾燥するように心がけてください。夜間の加湿は徒長や病気の発生の原因になります。開花する前の頭上からの灌水はさほど問題にはなりません、蕾が柔らかくなった頃からは花の痛みを防ぐために頭上灌水は避けるようにしてください。また、気温の低い時期は加湿による根腐れを防ぐため常に乾燥気味の水管理を心掛けてください。

### スペーシング

9cmポット生産では一般的に1平方メートル当たり120株が目安ですが、葉が隣のポットと接するようになったら1平方メートルあたり75株から85株に広げてください。

### 栽培温度

カーネーションの生育には温度管理が大きく作用しますので、温度管理は特に注意が必要です。冬場の夜温は最低 $5^{\circ}\text{C}$ から $8^{\circ}\text{C}$ を保つようにしてください。また、春先の昼温は光の強さにもよりますが、 $10^{\circ}\text{C}$ から $15^{\circ}\text{C}$ の間を保つような管理を心がけてください。

### 炭酸ガス施用

二酸化炭素の施用は生育を促進し、品質を上げる効果があります。最適な二酸化炭素の供給濃度は約700~1000ppmといわれています。また、長日処理は開花までの期間を短縮させる効果があります。ただし、長日処理中は温度を $12^{\circ}\text{C}$ から $14^{\circ}\text{C}$ に保ってください。

### わい化剤について

栽培環境により異なりますが、一般的に夜温と昼間の温度差が大きい場合は、わい化剤を使用します。特に春先の生育後半には特に昼夜の温度差が大きいため、わい化剤の散布は必要です。わい化剤は生育初期にはボンザイの0.2から0.3%を、その後生育が進むに従って濃度をあげていきます。

### 病虫害

害虫ではアブラムシ、スリップス、ホコリダニに注意が必要です。病気ではアルタナリアに最も注意してください。

### 出荷ラベル

ヒルベルダでは各品種の写真つきラベルを用意しており、それには簡単な栽培情報も提供しております。

### 注意点

- 同品種を生産するにあたって、ここで示されている栽培情報は基本的な参考資料としてご利用ください。生産された植物は、気候条件や地理的な緯・経度、また作型の時期、ハウスの環境によって結果が異なることがあります
- 殺虫・殺菌剤、また矮化剤の使用についての記載はあくまでもガイドラインであり、必ず使用方法を十分にまた正しく読み、使用者の自らの責任のもとでそれに則った正しい使用方法とるようにしましょう
- EC値(電気伝導度)は、ピート主体の北米の用土を算出の基準としているので、土を用いた配合では適合し得ない場合があります。